

教育学部以外の学生を対象とした「教職実践演習（仮称）」の試行 －卒業後のアンケートから見えること－

田宮 弘 宣〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕
下野 浩 二〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

An Attempt of “Teaching-job Practical Seminar (Tentative Name)” for the Students Other than Faculty of Education : From the Questionnaire Consideration after It Ggraduates

TAMIYA Hironobu · SHIMONO Koji

キーワード：教員養成、教職実践演習、教員、資質能力、実践的教職科目

1 はじめに

鹿児島大学教育学部では、平成19年度より「県教育委員会との連携による新しい教員養成カリキュラムの開発・実施」事業（特別教育研究経費事業）を推進している。ここでは教育学部におけるカリキュラム開発はもちろんであるが、教育学部以外も含めた全学の教員養成体制の整備・充実もねらいとしている。本稿は、この事業の一環として、教育学部以外の学生を対象に、平成19年度、試行した「教職実践演習（仮称）」の実践報告であるが、本年度、卒業後に学校教員として採用された受講生へのアンケートを実施したので、そのことを含めた報告とした。

平成18年7月の中教審答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」を受け、本学の教員養成カリキュラム委員会においても、必修化が提言された「教職実践演習（仮称）」の位置づけ、運営などが検討課題となっている。教育学部以外から、科目の内容や運営などについての具体像を把握したいとの要望もあり、試行することとした。

また、この試行は教育学部附属教育実践総合センターの教員4名が担当したが、上述の特別教育

研究経費事業において県教委から派遣された教員であり、その前職等は次のとおりである。

教授2名（中学校長（中学校・国語）、教育委員会指導主事（小学校））、准教授2名（中学校教頭（中学校・社会）、県総合教育センター研究主事（小学校））

2 授業の概要

(1) 講座の開設及び受講生

平成19年度後期に、自主講座として開講した。

表1 受講者について

学部	学部生	研究科生
法文学部	中学・英語 4名	中学・社会 2名
	高校・英語 1名	
	中学・社会 1名	
理学部	中学・理科 2名	中学・数学 3名 高校・数学 2名
	高校・数学 2名	
	高校・理科 1名	
工学部	高校・理科 1名	
農学部	中学・理科 1名	高校・理科 1名
	高校・理科 1名	
水産学部	高校・理科 1名	—
計	15名	8名
	23名	

教育学部以外で課程認定を受けている法文学部・理学部・工学部・農学部・水産学部で、教員を志望する最終学年の学生を対象に、教員養成カリキュラム委員会を通して希望者を募った。また、今回は学部4年生以外にも対象を広げ、研究科2年生にも参加を募っている。受講者数及び志望校種・教科は表1のとおりである。



- (2) 授業の目的
 この科目の履修により、将来教員になる上で必要な知識・技能等に関して、自己の課題を自覚するとともに、必要に応じて不足している点を補うなど、その定着を図る。
- (3) 授業の内容・方法及び展開 (表2・3参照)

表2 授業の内容・方法

主なねらい	主な内容	方法
【使命感・責任感、教育的愛情】 教員の使命・職務を中心に、教職に関する理解の深化を図る。	○「教師に求められる資質能力」 「学校組織と同僚性」 ○小論文へのまとめと相互批評 ○研究討議 (例：教師としての資質能力)	講義 ワーク グループ討議
【社会性・対人関係能力】 社会人としての在り方や保護者との連携を中心に、教員の在り方に関する理解を深める。	○「社会人としての在り方及びマナー」 「教員の服務規律」 ○実践的な場面を想定した実技演習 「保護者からの相談への対応」、「地域の方からの問い合わせへの対応」等 ○研究討議 (例：保護者との連携の在り方)	講義 ロールプレイング グループ討議
【生徒理解、学級経営】 生徒指導や学級経営を中心とした指導力向上を図る。	○「心に届く生徒指導」、「担任の実務」 ○実践的な場面を想定した実技演習 「短学活・SHRでの担任の役割」、「PTA集会での保護者への話」等 ○研究討議 (例：心に届く担任講話)	講義 ロールプレイング グループ討議
【教科指導力】 教科指導力の向上を図る。	○「学習指導とその評価」 「学習指導案作成の方法」 ○模擬授業による実技演習 ○研究討議 (例：定着度の低い学習内容の指導の工夫)	講義 模擬授業 グループ討議

表3 授業の展開 (事前の自己診断をもとに当初の計画を一部修正して実施した。)

回	期日	内容・方法	担当
1	10/10	○ オリエンテーション (講座のねらい・授業計画等) ○ 事前の自己診断 (教員としての資質能力の自己評価)	田宮 大久保
2	10/18	○ 教職に関する理解 【講義及び意見交換】 「現代の教師に求められる資質能力」、「学校組織」	下野
3	10/25	○ 教職に関する理解 【小論文作成及び意見交換】 前回をもとに、自らの意見構築・表明の仕方を学ぶ。	隈元・下野・大久保
4	11/ 1	○ 教員の在り方に関する理解 【講義及び意見交換】 「社会人としての在り方及びマナー」、「服務規律」	隈元
5	11/ 8	○ 教員の在り方に関する理解 【ロールプレイング】 「保護者の相談への対応」「クレームへの対応」など	隈元・下野・大久保
6	11/15	○ 教科指導力の向上 【講義及び意見交換】 「学習指導とその評価」、「学習指導案作成の方法」	田宮
7	11/22	○ 生徒指導・学級経営に関する指導力向上 【講義及び意見交換】 「心に届く生徒指導」、「担任の実務」	大久保
8	11/29	○ 教科指導力の向上 【模擬授業】 各自の課題にもとづき、その解決を図る授業を計画・実施する。	隈元・下野・大久保・田宮
9	12/6	○ 教科指導力、生徒指導・学級経営に関する指導力向上 【学校参観】 異校種の授業参観を目的とする。附属小(中学校教員志望者)と附属中(高校教員志望者)に分かれて、自分の免許教科の授業を参観する。	同上
10	12/13	○ 教科指導力、生徒指導・学級経営に関する指導力向上 【意見交換】 学校参観の感想をもとに授業における指導の在り方を中心に協議する。	同上

11	12/20	○ 総括・まとめ 【研究討議～課題設定と解決方策の検討】 グループで、実践場面を想定した課題を設定し、解決の方策を話し合う。	同上
12	1/10	○ 総括・まとめ 【研究討議～発表準備及び発表シミュレーション】	同上
13	1/16	○ 生徒指導・学級経営に関する指導力向上 【講義及び意見交換】 「教育相談・カウンセリングマインド」 教育実践総合センター 関山准教授	教育実践総合センター 関山准教授
14	1/24	○ 総括・まとめ 【研究発表及び意見交換】 ○ 事後の自己診断（教員としての資質能力の自己評価）	下野・田宮

3 試行の実際

(1) 事前の自己診断

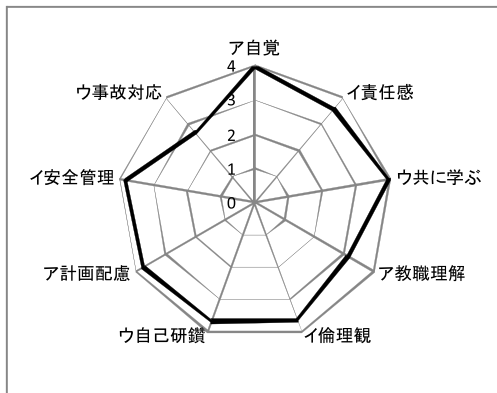
授業の第1回で、教員として必要な資質能力に関する自己評価を実施した。この際の資質能力については、中教審答申に示されている到達目標とその確認指標例1)をもとに「教員として必要な資質能力の課題チェック表」としてリストアップした(215・216頁の表6参照)。

図1のグラフは、4段階で自己評価させた結果

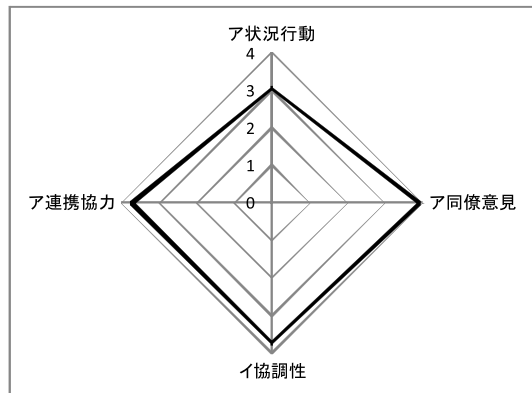
で、受講生の平均値を示している。

この結果を見ると、「使命感や責任感、社会性や人間関係能力に関する事項」は評価が高かった。授業を進める中で、確かに積極的な姿勢や教職への意欲を感じさせる受講者が多かった。一方で「教科等の指導力に関する事項」の評価と「児童生徒理解や学級経営等に関する事項」についての評価が低い傾向が見られた。受講生はすでに教育実習を終えているが、教育実習では教科指導が

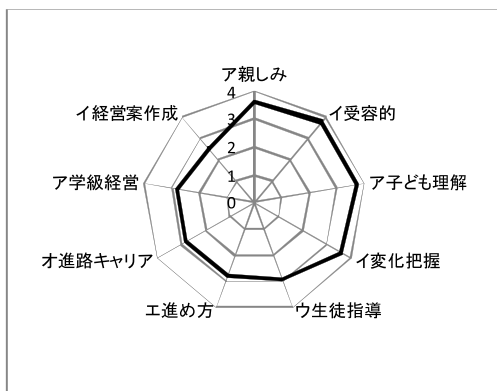
1 使命感や責任感、教育的愛情等に関すること



2 社会性や人間関係能力に関すること



3 幼児児童生徒理解や学級経営等に関すること



4 教科・保育内容等の指導力に関すること

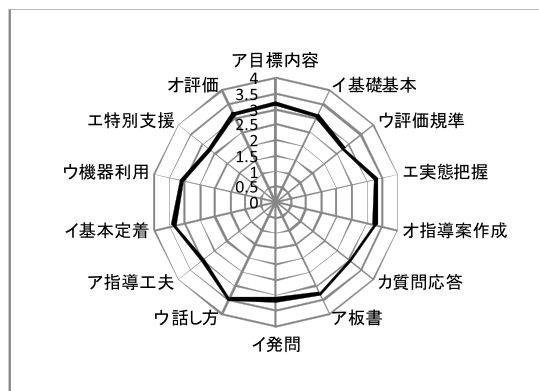


図1 教員として必要な資質能力に関する自己評価（事前）の結果

中心となる場面が多い。そこで課題となったことを意識していること、また、教科指導以外の担任業務の苦労等を具体的に経験していないために不安があることなどが原因であると思われる。

このような実態を考慮しながら、「児童生徒理解や学級経営等に関する事項」に関して、さらに力量を高める必要があるという回答が多かった教育相談やカウンセリングマインドについての授業を組み込むなど、事前の計画を一部変更しながら授業を行った。

(2) 授業の様子 (前半)

第2回目以降、前半は主に「教員としての使命感や責任感」や「社会性・人間関係能力」に関わる講義・グループワーク等を中心に行った。

第2回の講義「教師に求められるもの」を受けて、第3回では「教師としての使命感・職責感」というテーマでの小論文を作成させた。内容はもちろんだが、相手に伝わるように文章で表現することは教師として大切な技能でもある。

また、これらの講義や第4回の服務規律や社会人としてのマナーなど教員の在り方に関する講義を踏まえ、第5回では6名程度の小グループに分かれ、保護者との面談を想定したロールプレイングを行った。教員としての在り方を踏まえた行動とはどうすることか、模擬的な面談を通して学んだことは多かったようである。

受講者の感想より

○先週、小論文のテーマを聞いた時はすごく漠然としていて、なかなかうまく考えをまとめることができなかった。そのため、ありきたりな言葉を使ってしまい、自分の考えている小論文ではなかったように思う。グループに分かれて他の人の小論文を聞くとそれをより強く感じた。【第3回の感想】

○保護者や児童生徒に対応する際、すべてはこれまでの経験によって行うものだという意識がありました。しかし、今回ロールプレイングで相談の目的として、安心させ、納得させ、整理させることができること、聞くことの重要性など、多くの技術面だけでなく、相談の目的や意義を知ることができたことは、今後の活動に必ず役立つことだったと思います。保護者や児童生徒の信頼を得るにはこういった相談や面談はとても大切だと思うので、とてもよい体験をさせていただきました。【第5回の感想】

第6回以降は事前の自己診断で評価が低かった教科等の指導力、生徒指導や学級経営に関するテーマを扱った。学習指導案作成や学習評価に関する講義を行うと共に、生徒指導や学級経営などの両輪として学習指導があることを踏まえ、生徒理解やいじめや不登校への対応、学級経営の実際に関する講義も行った。その後、教科別グループに分かれ、模擬授業を行った。講義で示されたポイント等を踏まえて教育実習で実施した授業を改善するなど、15分程度ずつ授業の一部分を行い、その後グループ内で互いの授業について意見交換した。第9回で附属小・中学校の授業参観を行うが、この模擬授業を通して、自分が学び取りたい事項を明確にして授業参観に臨ませた。授業参観は志望する校種での教育実習を終えていることを踏まえ、中学校教員志望者は小学校を、高校教員希望者は中学校を参観させ、自分が指導する前段階の校種での指導を学べるようにした。参観後は授業者との授業研究の場を設けてもらい、具体的な指導の在り方などについて熱心に質問をしていた。また、第10回では、参観で学んだ点等をまとめ、校種ごとのグループで、学習指導の在り方を中心に意見交換した。ただ、参観後の感想として、自分の志望する校種での授業参観を望む学生もおり、志望する校種等での体験と併せて異校種での参観を計画するなど、学生の課題意識に応じた体験とすることは課題として残った。

(3) 授業の様子 (後半)

第11回以降はまとめとして、4～5名の班に分かれ、実践的な場面を想定した課題を設定して、その解決の方策を話し合い、発表する取組を行った。各班が設定した課題等は以下のとおりである。

1班	「授業展開の工夫」 特に、発問の工夫と事象提示の工夫について
2班	「クレームへの対応の在り方」 特に、保護者からのクレームとその対応について
3班	「進路指導の在り方」 指導の在り方や留意点、実際の指導の在り方について
4班	「学習に対する興味・関心・動機付け」 興味・関心の生かし方や評価・KRなどの在り方について

課題追究そのものが一人一人の考えや思いを鍛えるが、活動の初めにあえて「共同作業」の意義を強調した。学校教育は組織としての活動であり、学校内外において他と連携・協力することが不可欠である。そこに求められる社会性や人間関係性は、その必要性を説くだけでなく、学生自身がそのことを意識して取り組む体験によって鍛えられる。このグループワークはその意味でも有意義であったと考える。

最終回は、各班が課題追究・討議の結果をプレゼンテーションする形で発表会を行った。グループワークを始めてから1か月程度の期間はあったが、年末・年始をはさんだ時期で、授業でのグループワークは2回だけと十分な時間ではなかった。しかし、自分たちで自主的に集まってまとめたり、作業を分担して進めるなど、それぞれの班

が工夫していた。発表は質疑応答も含めて20分程度ずつとしたが、各班とも内容が充実しており、聞きごたえのある発表であった。

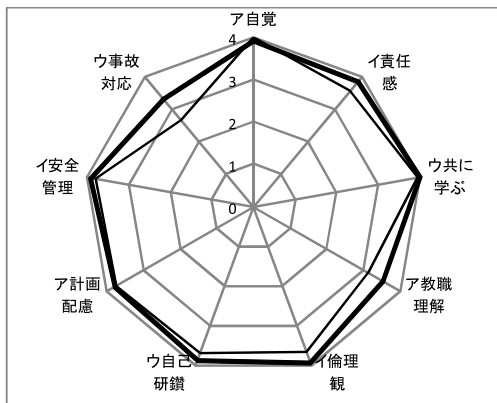
(4) 講座を通しての感想及び事後の自己診断

講座全体を通しての受講生の感想を見ると、学部が異なる中でも、教員を目指すというお互いの意欲に励まされ、積極的に取り組めたことが印象深かったようである。また、より実践的な側面での指導や助言を求めている様子もうかがえた。

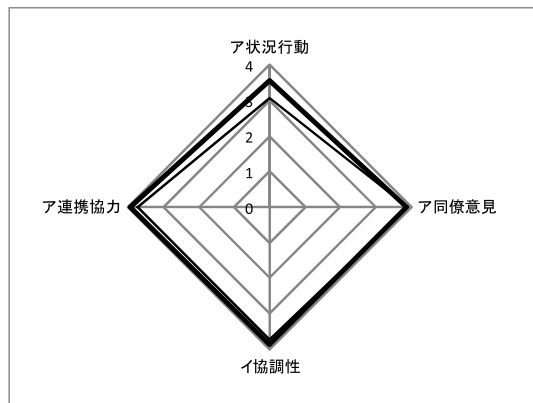
授業内容については、ロールプレイングやグループ討議などにより、実践的に学ぶものが役立ったという声が多かった。また、もう少しそのような授業内容が多く欲しかったという要望もあった。

さらに、事前の自己診断と同様に、最終回で教員として必要な資質能力について、事後の自己評

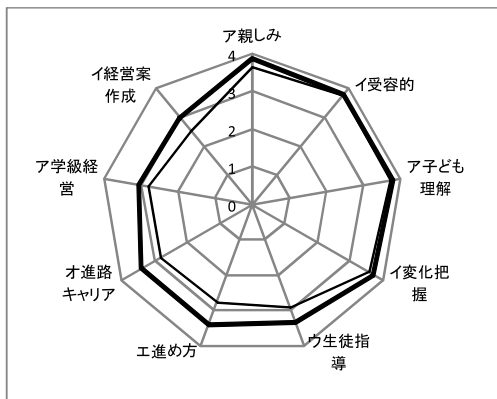
1 使命感や責任感、教育的愛情等に関すること



2 社会性や人間関係能力に関すること



3 幼児児童生徒理解や学級経営等に関すること



4 教科・保育内容等の指導力に関すること

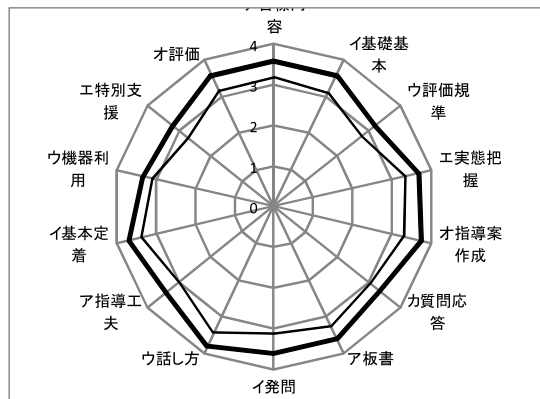


図2 教員として必要な資質能力に関する自己評価（事後）の結果

価を行った。下のグラフ中の細線が事前、太線が事後のものである。事前の自己診断を生かした授業の成果として、児童生徒理解や学級経営等に関すること、教科等の指導力に関すること、事故対応などについての自己評価は向上している。ただし、これらを教員が明確に評価する基準については、今回の試行の中で十分に明らかにすることはできなかった。今後さらに検討したい点である。

4 教員採用後の受講生へのアンケート

この実践は平成19年度に行ったものだが、受講生の中で、平成20年4月から鹿児島県の公立学校教員として採用された5名にアンケートを実施した。時期は1学期を終えた7月末である。

回答者が5名と数が少ないこと、採用後4か月程度であり、教員としての資質能力を試される場面はまださほど多くないと思われることなどから、このアンケートで今回の試行の成果を判断することはできない。ただし、不安の多い教職のスタート時期にも対応できる授業内容へと今後改善していくために、参考にしたいと考える。回答への協力が得られた5名の校種や校務分掌等は表4のとおりである。

表4 アンケート回答者について

校 種	担当学年	担当教科
中 学 校	1年副担任	理 科
中 学 校	1年副担任	社 会
中 学 校	1年副担任	英 語
高 校	1年副担任	数 学
特別支援学校	中 学 部	理 科
	3年副担任	

アンケートでは、試行実践の各回の授業内容、「資質能力の課題チェック表」の各項目を振り返ってもらい、4か月程度の経験ではあるが、その中で重要性を感じるがあった資質能力、現在自分の課題と意識している事項、教員になって役立っていると思う授業内容を尋ねた。

(1) 重要性を感じる資質能力

事前・事後の自己診断に使った「資質能力の課題チェック表」の項目にしたがい、「重要性を感じる機会」が多かったかどうか、4段階で評価さ

せた(表6参照)。

まず、「教科の指導力等」に関する項目については、ほぼすべて「重要性を感じる機会が多い」と回答している。当然のことであるが、毎日の授業をどのように展開していくかは教員の最大の務めである。また、「社会人としての基本的な態度」や「組織の一員としての自覚の重要性」を感じる機会も多いようであるが、それに比して「保護者や地域の関係者との人間関係づくり」は重要性を感じる機会は少ないことがうかがえる。このことは回答者5名とも副担任であり、保護者との連携などに関しては、まだ担任ほど直接的に関わる場面が少ないためと考えられる。このことは「生徒理解や学級経営に関すること」にも共通して表れていると考えるが、これらの重要性を感じる機会は今後増えてくると思われる。

(2) 課題意識を持っている事項

例示した27項目の中から、現在自分の課題だと意識している事項について、上位の5つを選ばせた(表5参照)。

表5 課題意識を持っている事項

項 目	選んだ際の順位					各項目を選んだ人数
	1	2	3	4	5	
1 授業の進め方や指導技術	1		1			2
2 学習のしつけや習慣づくり	2	2	1			5
3 教材内容の理解や授業づくり	2					2
4 教育機器や教具等の活用						
5 評価や評価問題作成		1	1	2	1	5
6 学習指導要領や教育課程の理解						
7 保護者との接し方や人間関係づくり						
8 同僚職員との接し方や人間関係づくり					1	1
9 地域関係者等との接し方や人間関係づくり						
10 生徒への接し方や人間関係づくり				1		1
11 学級経営					1	1
12 問題行動への対応						
13 いじめや不登校への対応		1				1
14 生徒への指導の在り方			1	1		2
15 部活動の指導					1	1
16 特別支援教育			1			1
17 教育相談など相談活動						
18 進路指導						
19 道徳教育や道徳の時間の指導					1	1
20 総合的な学習の時間の指導						
21 学級活動や学校行事の指導		1				1
22 給食指導				1		1
23 生徒の安全管理や健康管理						
24 健康・体力づくりの指導						
25 校務分掌						
26 服務規律や勤務						
27 研修の進め方						
その他						

表6 重要性を感じる資質能力（アンケート結果）

教員として必要な資質能力の課題チェック表

【問い】 次の「教員として必要な資質能力の課題チェック表」の各項目について、この4か月で、その重要性を感じるものがあつたかどうか、A～Dで回答してください。

A B C D
重 重 重 重
要 要 要 要
こ 性 性 性
と 性 性 性
が 感 と と 感
多 じ と と は 感
い じ き 少 を は
る ぶ ない じ
な いた

1 使命感や責任感、教育的愛情等に関すること

① 教育への使命感や情熱など

- ア 教職は児童生徒の教育を司り、子どもの人格形成や生き方に重要な影響を及ぼす専門職であることを自覚していますか。
- イ 誠実な気持ちで、どの子どもにも公平に、かつ責任感を持って接することができますか。
- ウ 教師として子どもからも学び、共に成長しようとする意識を持って指導に当たることができますか。

A	B	C	D
3	2		
4	1		
4	1		

② 倫理観や規範意識など

- ア 教員の使命や職務についての基本的な事項(身分、服務、法規など)について理解していますか。
- イ 公立学校教員は教育公務員であり、保護者や県民からの社会的信頼を確立するため、高い倫理観が求められることを理解していますか。
- ウ 自分の課題を明らかにし、その解決に向けて自己研鑽し、常に学び続けようと考えていますか。

A	B	C	D
3	2		
3	2		
5			

③ 子どもの成長や安全、健康への配慮

- ア 具体的な教育活動を組み立てる際は、子どもの成長や安全、健康管理に十分配慮することが大切であることを理解していますか。
- イ 学校環境や周囲の安全管理に気を配り、常に子どもの生命や安全を守ろうとする意識を持つことの大切さを理解していますか。
- ウ 事故が発生したときの現場での処置、学校の組織的対応、保護者との連携、及び子どもへの指導の在り方などについて理解していますか。

A	B	C	D
2	3		
2	3		
3	2		

2 社会性や人間関係能力に関すること

① 目的や状況に応じた行動

- ア あいさつや服装、言葉遣い、他の同僚や保護者への接し方など、社会人としての基本的な態度は身に付いていますか。

A	B	C	D
5			

② 組織の一員としての自覚、態度

- ア 他の同僚の意見やアドバイスに耳を傾け、理解や協力を得ながら、自分の職務を遂行することの大切さを理解していますか。
- イ 学校組織の一員として、独りよがりにならず、協調性や柔軟性を持って職務を遂行することの大切さを理解していますか。

A	B	C	D
5			
5			

③ 保護者や地域の関係者との人間関係づくり

- ア 保護者や地域の関係者の意見・要望に耳を傾け、連携・協力しながら課題に対処することの大切さを理解していますか。

A	B	C	D
3	2		

3 幼児児童生徒理解や学級経営等に関すること

① 子どもへの受容的な態度、人間的交流

- ア 気軽に子どもと顔を合わせたり、相談に乗ったりするなど、親しみを持った態度で接することができますか。
- イ どの子どもに対しても受容的な態度で接し、人間的なふれあいを深めようとする姿勢を持っていますか。

A	B	C	D
5			
5			

※ 各欄中の数字は回答者数

② 発達や心身の状況に応じた課題の理解と指導

- ア 子どもの声を真摯に受け止め、健康状態や性格、生育歴等を理解し指導に適切に生かそうと考えていますか。
- イ 社会状況や時代の変化に伴って生じる教育課題や子どもの変化を、進んで捉えようとしていますか。
- ウ 生徒指導に臨む教師の態度や、いじめ、不登校についての基本的な指導の在り方などについて理解していますか。
- エ 日ごろの子ども理解や教育相談の基本的な進め方などについて理解していますか。
- オ 児童生徒の主体的な生き方や自己実現を支援するキャリア教育、進路指導の基本的な考え方について理解していますか。

A	B	C	D
4	1		
3	2		
5			
2	3		
2	3		

③ 子どもとの信頼関係、学級経営

- ア 子どもの特性や心身の状況を踏まえた学級経営の基本的な考え方について理解していますか。
- イ 支持的風土に満ちた規律ある学級づくりをめざして、自分なりの学級経営案を作成することができますか。

A	B	C	D
4	1		
3	2		

4 教科・保育内容等の指導力に関すること

① 学習指導の基本的な事項

- ア 学習指導要領や年間指導計画などで、単元の目標や指導内容などを確認することができますか。
- イ 教科書や資料などを分析して教育的価値を明らかにし、指導すべき基礎的・基本的な内容を明確におさえることができますか。
- ウ 目標を達成した具体的な子どもの姿を「評価規準」として設定し、計画的に評価することができますか。
- エ 子どもの実態や意識について把握し、指導方法や教材教具の工夫に活かすことができますか。
- オ 導入・展開・終末の基本的な指導過程にそって、一単位時間の学習指導案を作成することができますか。
- カ 教科書を用いて分かりやすく学習を組み立てるとともに、子どもからの質問に的確に答えることができますか。

A	B	C	D
5			
5			
5			
5			
4	1		
5			

② 板書、話し方、表情などの基本的な表現力

- ア 学習の流れにそって、子どもの反応を受け止めながら内容を構造化したり、丁寧に板書したりすることができますか。
- イ 学習のねらいにそって、興味・関心を高めたり思考を深めたりするような発問を工夫することができますか。
- ウ 話し方や表情を工夫したり、子どもの反応に対してうなずきやほほえみ、相槌を与えたりすることができますか。

A	B	C	D
5			
5			
5			

③ 学習の状況に応じた指導の工夫

- ア 定着の状況に応じて、学習形態を修正したり、個に応じた指導などきめ細かな指導を工夫したりすることができますか。
- イ 基礎的・基本的な内容について反復指導したり、具体物の提示や実験などを工夫したりして、定着を図る工夫をすることができますか。
- ウ 視聴覚機器や教育機器を積極的に活用して興味・関心を高め、指導の効果を高めることができますか。
- エ 子どもの障害の程度や特性などに配慮して教材・教具を工夫したり、個に応じた指導を工夫したりすることができますか。
- オ 学習中や学習前後の子どもたちの変容を評価し、補充指導や授業の改善に役立てることができますか。

A	B	C	D
5			
5			
5			
5			
5			

前述(1)と同様、授業や学習指導に関する回答が多かった。特に、「学習のしつけや習慣づくり」、「評価や評価問題作成」などは、今回の試行実践の授業内容において、一般論としては扱ったが実践的に自分たちで試してみるところまではできていない。今後の改善点として検討したい点であると考えた。

(3) 役立っていると感じた授業内容

14回の授業のうち、教員になって役立っていると感じる回について上位4つを選ばせた。複数名が選んだ回とその人数は以下の通りである。

第9回の学校参観（5名）

第2回の講義「教職に関する理解」（3名）

第5回のロールプレイング（2名）

第7回の講義「生徒指導・学級経営」（2名）

第8回の模擬授業（2名）

第14回の研究発表（2名）

回答者5名とも第9回の学校参観を挙げており、実際の現場に触れたり、実際に指導している教員との意見交換ができたことの効果は大きいと言える。これらをいかに授業の中に位置づけていくのがよいのか、さらに検討したい点である。

また、授業内容に関する要望として次のような記述が見られた。

- ・ 評価に関することを学んだが、実践することが難しかったので、もっと充実させてほしい。
- ・ 評価テストの作成方法、観点別評価の方法、初任者としての心構え、学級活動の仕方、生徒の動かし方
- ・ 学習指導案作成の基本的なこと。現場のさまざまな校種のなるべくたくさんの指導案を見ることだけでも、自分のものと比較して勉強になる。文書の書き方の決まりごと。評価の仕方、意欲や態度をどのように評価するのか、シミュレーションでもいいので評価をやらせてみる。
- ・ 実際の事例について考える良い機会になるからロールプレイはよいと思う。またLHRや総合学習の授業例を見ることができたらよいと思う。
- ・ 授業参観は希望する校種のものを見られた方がよいと思った。

(4) アンケートの考察

先に述べたとおり、試行の成果を検証する資料としては十分なものではないが、このアンケートから、以下の点は今後の改善点として検討してみべきであると考えた。

- ① 育成すべき資質能力として「教科の指導力等」を重視すること。その他の重要な資質能力も軽視すべきではないが、いかに毎日の授業を充実させるかは教職に就いた際の最初の大きな課題であり、教科指導における不安や弱点を十分に解決して教職に就かせるべきである。
- ② 教科指導においては、学習のしつけや習慣づくりや評価問題の作成など、教科担任として担うべき実際的なことがらも十分踏まえた内容や方法を検討したい。
- ③ 教員としての指導力育成のためには、実践的な授業内容、特に、学校現場での参観や実践は重要なものになると考えられる。学生の実態や自己課題も踏まえながら、それらに対応できるカリキュラム作りが重要である。また、そのためには、参観やフィールドワーク等を実施するための協力校の体制づくり・関係づくりを進めることが不可欠である。

5 成果及び課題

本実践は、本学の教員養成カリキュラム委員会での検討を進めるための一つのたたき台として試行したものであるが、自主講座での希望者開講ということもあり、「教職実践演習」の趣旨を踏まえた展開とするためにいくつかの限界や不十分な点もあった。

特に、担当教員の体制に関して、「教職に関する科目の担当教員」や「教科に関する科目の担当教員」の参加あるいは連携の体制づくりについては手掛けることができなかった。構想の不十分さのせいもあるが、今後、導入に向けては十分に検討や準備を進めていかなければならない点である。

その他、今回の試行の成果を踏まえつつ、今後検討していくべき課題を中心に、指導体制・授業内容・資質能力の評価の3点からまとめる。

(1) 指導体制

- 中教審答申で示されている適正な規模（20名

程度)の少人数での授業を試行することができた。学生の実態や要望を把握しながらの展開が可能であり、また、学校参観など学外での活動にも対応しやすい規模であった。

- 教育実践総合センターの教員4名が担当したが、必要に応じてチームティーチングの形がとれるとより効果的であることがわかった。中教審答申においては、TA(ティーチングアシスト)等の活用も示されているが、各学部の教員配置等を考慮しながら、積極的に活用することも検討したい。
- 希望者受講の自主講座のため20名程度の規模であったが、その志望校種や教科は多様であり、個々の課題に応じたコース分け等についての実証・検討は不十分であった。授業内容の設定とも関係するが、学生の課題等に応じたクラスやコースをいくつ程度あるいはどのように設定するかを検討するとともに、その中で「教職に関する科目の担当教員」や「教科に関する科目の担当教員」がどのように科目を担当するかあるいはできるかについて、今後さらに検討して行かねばならない。
- 実践的な授業内容として、学校現場での実習やフィールドワーク等は重要であり、教育学部以外の学生の場合は高校志望の学生も多いが、高校との連携や協力の体制づくりはほとんどなされておらず、対策を講ずる必要がある。

(2) 授業内容

- 事前の自己診断等を活用して、学生の実態に応じた授業内容の設定ができた。また、現場経験のある教員が担当したこともあり、実践的な場面や事例等を具体的に提示しながら、授業を進めることができた。受講者も実際の学校現場で何が必要とされ、何を身につけておくべきかを、しっかりと理解したいという意識が強いことが確認できた。
- 個々のテーマや授業に即して課題意識を持たせたが、教員としての資質能力に照らした自己課題の明確化あるいは具体化の手順と授業展開が不十分であり課題となった。事前の自己評価をもとにしながら、あるいは各テーマに関して自己課題を明確にするとともに、その解決を図るコース分けや授業内容を設定するなど、「自己課題」の位置付けとその解決の手順を明確にする必要がある。
- 育成すべき資質能力として「教科の指導力等」に関するものは、最重要課題になると思われるが、学習のしつけや習慣づくりや評価問題の作成など、教科担任として担うべき実際的なことがらも十分踏まえ、実践的な内容や方法を検討することが必要である。
- 自主講座への希望による受講ということもあり、受講者の意欲や力量は比較的高かったが、必修科目として実施する場合、受講者の意欲等も必ずしも一様でないことが予想される。その中でも魅力的な授業内容となるような工夫が必要である。

(3) 育成すべき資質能力

- 中教審答申で例示されたものを参考にしながらではあったが、自己診断等を通して、教師として必要とされる資質能力を明示し、授業を行うことができた。さらに、この資質能力に関して、過不足はないのか、評価しやすい具体的な形になっているかなど、さらに改善を図りたい。
- 今回の試行では科目としての評価基準を明確にするところまで取り組めていない。自己評価項目等をもとにしながら、科目としての評価基準あるいは本学としての教員養成に関する評価基準の明確化を急ぐ必要がある。この点については、横浜国立大学教育学部の「横浜スタンダード」などの先行実践にも学びながら、明確にしていく必要がある。
- これまでの学生の履修履歴や資質能力の習得状況について、「教職に関する科目の担当教員」や「教科に関する科目の担当教員」との連携を十分に行うことができなかった。このことは先に述べた指導体制づくりと関わることであるが、今後十分に検討したい。また、この点については教員同士の連携というだけでなく、島根大学教育学部の「学生プロフィールシート」の取組に見られるような、学生個々の履修や習得の状況を診断できるシステムの構築も今後重要となってくると考える。

5 おわりに

受講生の中で今年の4月に教職に就いた5名からのアンケート回答を見ながら、それぞれの学校で、よりよい教員になることを目指して工夫したり苦勞したりしている様子の一端を感じた。今回の試行実践は、不十分な点もまだ多いものであったが、その中で学んだ学生が、教員として日々研鑽に努めていると考えると、大学における教員養成の重要性や責任を改めてかみしめるところである。また、教員としてさらにステップアップするために、大学教員が学校現場での研修にいかに関わり、連携・協力するかは卒業生へのフォローアップとしても、今後さらに充実させたいことである。教員養成から教員研修を一連のものとして体系的に取り組んでいることも十分に踏まえながら、教員養成カリキュラムの改善に努めていきたいと考える。

参考文献

- 1) 中央教育審議会，2006，「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（答申），62～64頁